

## 「坂の上の雲」の時代の日本とラテンアメリカ

細野昭雄  
JICA 研究所所長

「まことに小さな国が、開花期をむかえようとしている。」司馬遼太郎『坂の上の雲』冒頭の名文である。この物語は、NHK ドラマとなり昨年未終了した。NHK ドラマの最終回は、日本海海戦であったが、ここで、アルゼンチンとチリから譲り受けた艦船が大活躍したことは、日本ではあまり知られていない。チリから譲り受けた「和泉」（チリではエスメラルダ号）の活躍がなかったら、秋山真之海軍参謀の判断に影響し、海戦そのものにも影響したかもしれないのである。以下は、坂の上の雲の時代の日本とラテンアメリカの関係の「秘話」である。

日露戦争の開戦は 1904 年であったが、それより 30 年前の、明治維新からわずか 4 年の 1872 年に、この「まことに小さな国」が、ペルーに訴えられる。「マリア・ルス号事件」である。中国人（当時は清国人）クーリー 230 人余りが乗船していたペルー船籍のマリア・ルス号は、中国からペルーに向かっていたが、嵐で損傷したため修理のために横浜港に入港したところ、中国人が逃亡、イギリス船が救助した。イギリス政府は日本政府に中国人の救助を要請した。日本は特設裁判所を設け、中国人の解放を条件にマリア・ルス号の出港を許可するとしたが、ペルー側は、移民契約を盾にこれを不服とした。これに対し、裁判所は、この移民契約は人道に反する奴隷契約であるとして却下した。ペルーは、これに抗議し、日本ペルー両国合意の下、国際仲裁がロシア帝国により行われたが、ロシアは日本側の措置を妥当とする判決を行った。

この事件がきっかけとなり、翌 1873 年、明治維新政府はペルーと国交を結ぶこととなり、ペルーは、ラテンアメリカ諸国の中で最初に日本と国交を結んだ国となった。<sup>1</sup> 日本とメキシコの関係は、400 年前に遡る。2009 年は、日墨交流 400 周年の年となった。メキシコは、かつて、ヌエバ・エスパーニャと呼ばれ、スペイン支配下にあり、同じスペイン領であったフィリピンからの富は、メキシコを経由して本国に運ばれていた。従ってメキシコは、スペインとアジア諸国を結ぶ要衝であった。

そうした中、1609 年、フィリピンの総督であったロドリゴ・デ・ビベロの一行の船がメキシコに向かう途中、千葉県御宿の海岸近くで遭難し、村民に救助され、ビベロは、徳川家康、秀忠と会談した。その後、1614 年には、伊達政宗の命を受け、支倉常長の一行がヨーロッパに派遣されたが、途中、メキシコを訪問している。

幕末、日本は、欧米列強から不平等条約を締結させられた。明治維新後、日本にとって、不平等条約の廃止は悲願であったが、日本とメキシコが 1888 年に締結した、修好通商航海条約は、アジア諸国以外で初めての、平等な条約の締結となった。翌年には、米国との条約改正が実現するなど、この日墨修好通商航海条約の締結は、その後の西欧諸国との平等な条約の締結のための、重要な突破口となった。維新から 20 年を要した。

---

<sup>1</sup>細谷広美編著（2004）『ペルーを知るための 62 章』 pp.314-318 参照

当時、メキシコの駐ワシントン全権公使を務めていた、マティアス・ロメーロに、メキシコ外相は、次のような指示を出した。「メキシコ政府には日本国政府と完全に対等な条件の修好通商航海条約を結ぶ用意があることを、在米日本国公使館の長ないし書記官へ、迅速に伝達されたし。しかもその条約では、国際法上の一般原則を遵守するとともに、列強政府が対日条約で強いた優遇条項は、日本国政府が条約の破棄を望む正当な動機を与えるものであり、メキシコ政府はこうした条項を要求しない旨も伝達されたし。(以下略)」

こうして、5年に及ぶ会談や交渉、決裂や再協議などを経て、日本にとってアジア以外では、はじめての平等条約が締結された。この背景として、在日本メキシコ大使館が2008年に出版した『条約から条約へ：墨日国交120年』は、「列強の蛮行に苦しんだ経験を持つメキシコは、自らの領土についての完全なる主権を認める形で、公正かつ平等な待遇を獲得しようと望む日本の要求に対して、敏感であった。両国にとって、同条約の締結は主権の行使そのものであった。」と述べている。

さらに、その背景には、メキシコの独立以来の激動の歴史がある。メキシコは1821年に独立したが、スペインは再征服を狙い、独立後の混乱が続いた。しかも、メキシコの北部には、米国から、黒人奴隷をつれてアングロサクソン系の移住者の流入・入植が続いた。メキシコが奴隷制の廃止を打ち出すとこれら移住者が反乱をおこし、1836年にテキサスが共和国として独立することを宣言した。そして、1845年にアメリカ合衆国がテキサス共和国を併合、翌46年には、メキシコに対し宣戦布告し、米墨戦争が勃発する。48年メキシコは敗北し、テキサスだけでなく、カリフォルニア等をも失い、国土の半分を失った。

ついで、1861年には、イギリス、フランス、スペインがメキシコに介入、イギリス、スペインは撤退したが、フランスは、63年、首都メキシコ市を占領、ナポレオン3世により、マクシミリアンが送り込まれ、メキシコ帝国を樹立させた。その後、アメリカ合衆国における南北戦争の終結、ヨーロッパでの普仏戦争の勃発により、フランスは66年撤退した。このように、メキシコは、独立後、日本における明治維新の前夜の時期に至るまで、列強の介入が続く激動の時代を経験していた。

さて、メキシコとの条約締結5年後の、1893年、元外務大臣の、榎本武揚が海外移住を促進すべく、移民協会を設立、ハワイからグアテマラへ132人が移住した。これが、日本からラテンアメリカへの初めての集団移住となった。1897年には、榎本武揚の派遣した榎本殖民団がメキシコのチアパス州に向け出発した。これにより、日本人のメキシコへの移住が開始された。1899年からは、契約農園労働者として日本人がペルーに渡った。<sup>2</sup> ブラジルへの最初の移民は、1908年、笠戸丸による移住で開始された。

このように、明治維新直後に、ペルーとの接触が始まり、維新から20年後にメキシコと平等な条約が結ばれた。そして、「日本の開花期」、言い換えれば、日本が駆け登っ

---

<sup>2</sup> これは、約4半世紀つづき、1929年に中止された。この間にペルーに移民した日本人は約18000人に達した。その後は呼び寄せ移民が続き、第2次大戦前の1941年までに3万3000人の日本人がペルーに渡ったとされる。日本人のペルーへの移民の詳細については、細谷広美(編著)(2004年)『ペルーを知るための62章』、明石書店、p.325 参照

ていった「坂の上の雲」の時代に、日本からのラテンアメリカへの移住が開始されたのである。この時代のクライマックスとなった日清、日露戦争当時、「まことに小さな国」日本にアルゼンチンとチリが友好の手を差し伸べた。

日清戦争がはじまった1894年、日本は、海軍力の増強を急いでおり、ブラジル、アルゼンチン、チリに、艦艇購入の申し入れを行っていたが、チリが応じ、「エスメラルダ3世」を日本は購入した。この艦船は、1884年にイギリスで建造された、世界で初めて防御甲板を備えた新鋭巡洋艦であったとされる。その10年後の購入時は、日清戦争の最中であり、清国も南米諸国に軍艦譲渡の申し入れを行っていたことから、チリは戦時中立を維持し、清国への配慮から、一計を案じ、この巡洋艦をひとまずエクアドルに売り渡し、エクアドルのガラパゴス島に回航し、そこで、日本に渡す形をとった。これは、その後のエクアドル国内の政争の遠因となった。<sup>3</sup> 「エスメラルダ3世」は1895年横須賀に到着、「和泉」と命名された。

「エスメラルダ」はチリ独立ゆかりの艦名である。チリは1810年独立を宣言するが、スペインとの独立戦争がはじまり、1818年勝利する。20年には、ペルーの独立解放に向かったチリの海軍がスペインのフリゲート「エスメラルダ」を捕獲、チリ艦隊に編入した。その後、1855年には、「エスメラルダ2世」をイギリスに発注、この艦船は、65年に南米西岸を荒らしまわっていたスペイン艦隊と戦って勝利する。さらに、上述の「マリア・ルス号事件」から日も浅い1979年、チリとペルー・ボリビアの連合軍が戦う、南米の「太平洋戦争」が起こる。この戦争のイキケの海戦でも「エスメラルダ2世」号は活躍するが、沈められる。しかし、この艦船の活躍で優勢に立ったチリ軍は、この「太平洋戦争」を勝利する。「エスメラルダ」はこのように由緒ある艦名であり、第2次大戦後は練習帆船の名前となり、度々訪日している。

日露戦争前夜、ロシア海軍はバルチック艦隊、黒海艦隊、太平洋艦隊などを有し、その規模は80万トンであったのに対し、日本海軍は26万トンにとどまっていた。従って、日本にとって海軍力の増強は焦眉の急であった。日露開戦の前年、アルゼンチンは当時イタリアに建造発注しほとんど完成していた最新鋭装甲巡洋艦「リバダビア」と「モレノ」売却の可能性を日本に打診した。日本は直ぐ、交渉に応じ、両国は合意した。イタリアからこの二艦を横須賀に回航する大役を果たしたのは鈴木貫太郎（当時、海軍中佐、太平洋戦争終戦時の総理大臣）で、日露開戦の6日後に二艦が到着、「日進」、「春日」と命名された。アルゼンチンが日本に示した好意の背景には、日垂友好通商航海条約が1898年（メキシコとの条約の10年後）に結ばれていたことなどがある。また、アルゼンチンはチリとの国境紛争回避条約と軍縮協定で戦艦が不要となったという経緯がある。

最初にこの譲渡購入の交渉を行ったのは、当時アルゼンチンを兼轄していた駐ブラジル代理公使堀口九万一氏であった。堀口公使は、詩人堀口大学の尊父である。また、日本側に引き渡す際のアルゼンチン側代表であったドメック・ガルシア海軍大佐は、日本海海戦において観戦武官として「日進」に陪乗した。その際、詳細な記録をとり、膨大な報告書を本国に提出した。この報告書は単なる海戦の記録に留まらず新興国日本の海軍事情をつぶさに調査・分析したものであり、『1904年の日露戦争』と題して、

---

<sup>3</sup> 「エスメラルダ3世」の譲渡購入に関するいきさつ等については、増田義郎「チリ文化の回想」および、妹尾作太郎「日智両海軍友好一世紀の軌跡」（いずれも、日本チリ交流史編集委員会（1997）『日本チリ交流史』ラテンアメリカ協会）を参照した。

アルゼンチンで出版され、日垂修好 100 周年を記念して 1998 年に邦訳されている。<sup>4</sup>

「本日天気晴朗ナレドモ波高シ」の名文で知られる日本海海戦の作戦参謀、秋山真之中佐の作戦は、彼が観戦武官として熱心に観察、分析した米西戦争から多くの教訓を得ている。この 1897 年の戦争は、キューバの独立運動に介入したアメリカ合衆国とスペインの間の戦争である。米国が勝利し、1902 年キューバは米国の保護国としてスペインから独立した。同時にプエルトリコ、フィリッピンが米領となった。

日本海海戦の連合艦隊の旗艦、「三笠」につづく、第 1 戦隊の主力艦が、「敷島」、「富士」、「朝日」と、アルゼンチンから譲渡された「春日」、「日進」であった。当時の山本五十六候補生は「日進」に配乗されていた。

一方、チリから譲渡された「和泉」は、日清戦争にも参加したが、日露戦争で大活躍をする。徴用商船の仮装巡洋艦「信濃丸」の不備を救ったのが「和泉」であった。バルチック艦隊との接触の当初、連合艦隊で通信上の混乱があったが、「信濃丸」電報を傍受した「和泉」は直ちに急行し、敵艦隊からの攻撃を避けながら、接触を維持した。それは、あたかも、巨大なロシア熊を刈り出す、敏捷な猟犬の如くであったという。そして、「和泉」の報告が日本海海戦大勝利の基となったことは、東郷長官から同艦に軍功第 1 級の賞状が与えられていることから、うなづける<sup>5</sup>という。

アジア、アフリカ諸国の多くが、欧米の植民地となっていた「坂の上の雲」の時代、ラテンアメリカ諸国の多くは独立していた。新進気鋭の日本は、これら諸国との関係を、日本からの移住などを中心に、深めていった。戦後の、日本とラテンアメリカの緊密な関係は、こうした明治以来構築された、長期にわたる友好と信頼の関係を抜きにしては考えられない。

---

<sup>4</sup> アルゼンチンの 2 艦の譲渡購入に関しては、アルベルト松本（編著）（2005）『アルゼンチンを知るための 54 章』（pp.344-345）及び外務省資料を参照した。

<sup>5</sup> 妹尾作太郎「前掲論文」p.228 による。